体験活動を核としたキャリア教育の展開
ー自己理解を深める「経験ファイル」の活用を通してー

指導主事　渡　邊　晋一郎

Ⅰ　研究の趣旨

ニートやフリーターの数，並びに３年以内の離職率の増加が社会問題化されてすでに久しい。企業経営者や職業安定所職員は，その原因の一つとして若者の勤労観・職業観及びコミュニケーション能力等の諸能力の未発達，働くことに対する自己理解や職業理解の不足などを指摘するとともに，学校に対してそれらをはぐくむ教育の充実を求めている。

この問題に対処すべく，また，教育本来の役割の一つである望ましい勤労観･職業観の育成を目指し，キャリア教育の一環として職場体験活動がより一層重視されてきている。福島県内では，体験日数，実施方法に違いはあるものの，97.9%の公立中学校で実施されている。(平成19年度職場体験実施状況調査　国立教育政策研究所生徒指導研究センター)

一方，平成17年５月報告の同センターの「職場体験に関する調査研究報告書」によると，「職場体験の実施において重視・意識した点」の質問に対して，「キャリア教育の視点」を挙げた教師の割合は，全国の値では10.5%にとどまり，キャリア教育を意識した指導が十分になされていないことが読み取れる。また，福島県教育センター主催のキャリア教育研修会の「体験活動に関する研究協議」の際に，「体験することが目的となっている。」「その後の学校生活に生かされない。」等の問題点が指摘され，課題の一つに事前・事後指導の充実が挙げられた。

そこで今回，職場体験活動の事前・事後指導に焦点を当て，キャリア教育の視点を取り入れながら，働くことや将来の職業との関係から自己理解を深め，諸能力の育成につながる具体的な手立てを見いだすことを目標として研究を進めることとした。

Ⅱ　研究の実際

1　研究を進めるに当たって考慮した二つの条件

職場体験活動の事前・事後指導における具体的な手立てを考える上では，以下に示した内容面と方法面の二つの条件を考慮することとした。

条件①(内容面)
○キャリア教育の視点として ア　勤労観・職業観の育成につながる。 イ　職業に対する知識や技能の向上につながる。 ウ　自己理解を深めることにつながる。 エ　諸能力の発達につながる。
条件②(方法面)
ア　汎用性があり、どの学校でも活用できる。 イ　高等学校での活用につながる。(中高接続) ウ　時間、手間、費用をあまり必要としない。

条件①のア～エの四つの視点を設定する際，以下に示した「キャリア教育の定義」を参考とした。

> 「キャリア教育とは、望ましい職業観・勤労観[ア]及び職業に対する知識や技能[イ]を身に付けさせるとともに、自己の個性を理解[ウ]し主体的に進路を選択する能力・態度[エ]を育てる教育を意味する。」
> 中央教育審議会答申平成11年12月
> 「初等中等教育と高等学校との接続の改善について」

また，職業安定所職員や企業の人事担当者から，「最近の若者の特徴として，働くことに対する自己理解が不十分で，必要とされる諸能力が未発達である。」[2)]との指摘が多いことから，条件①のウとエを特に重視した。エの「諸能力の発達」については，次に示した国立教育政策研究所による「主な四つの能力」(以下「四能力」と表記）を参考とした。

1	人間関係形成能力	2	情報活用能力
3	将来設計能力	4	意思決定能力

2　「経験ファイル」を核とした三つの手立て

今回の研究では，上記の二つの条件を踏まえ，以下の①～③を具体的な手立てとして位置付けた。

> ①　体験活動に関する資料を綴じ込む，ポケット式クリアファイルの活用（「経験ファイル」）
> ②　①の資料として「ジョブパスポート」(厚生労働省ホームページからダウンロード）の活用
> ③　①の資料として「自己評価シート」「グラフ化シート」の開発とその活用

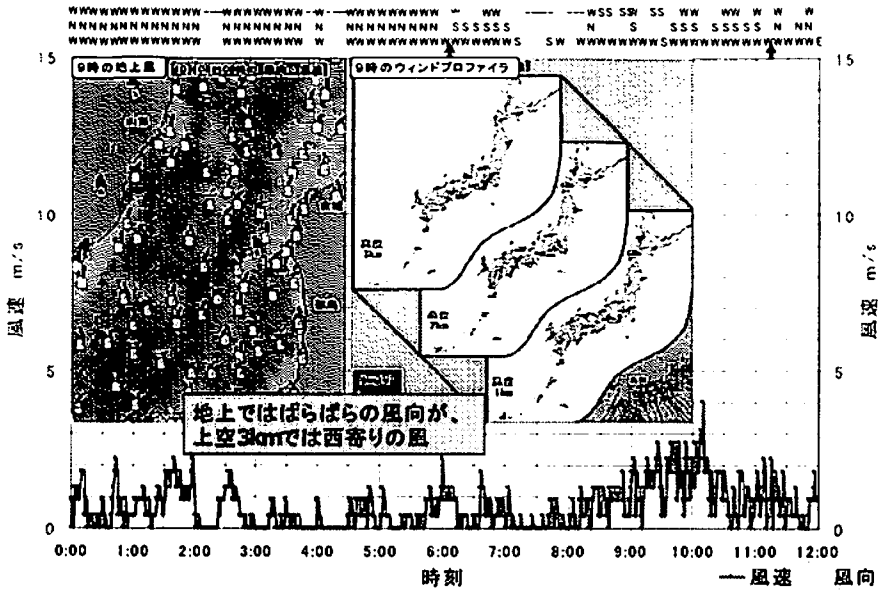


図5　風向と風速の変化　2008.10.04　午前

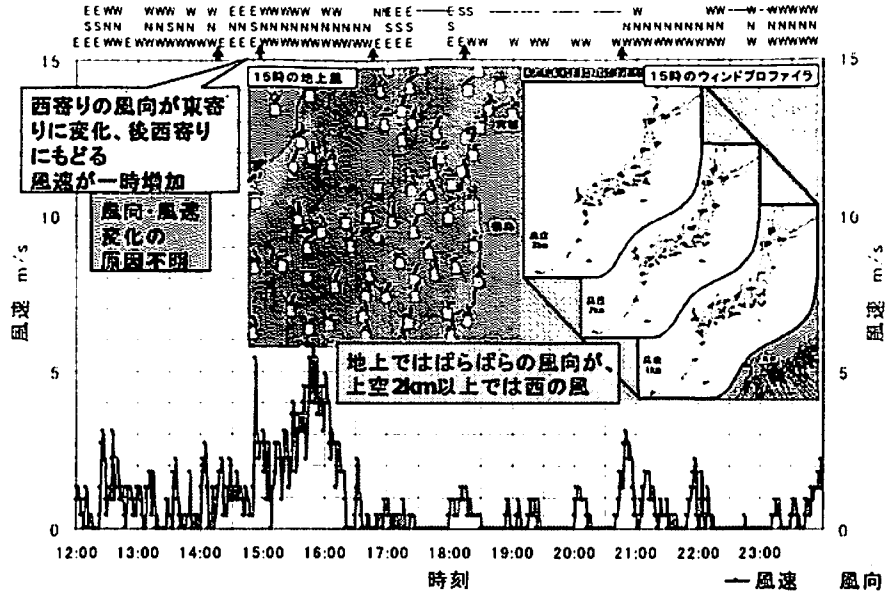


図6　風向と風速の変化　2008.10.04　午後

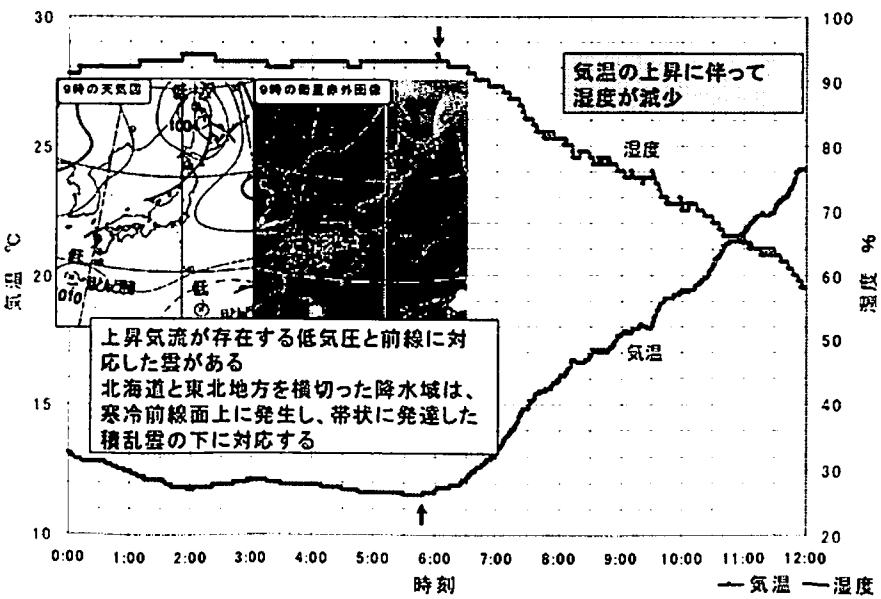


図7　気温と湿度の変化　2008.10.04　午前

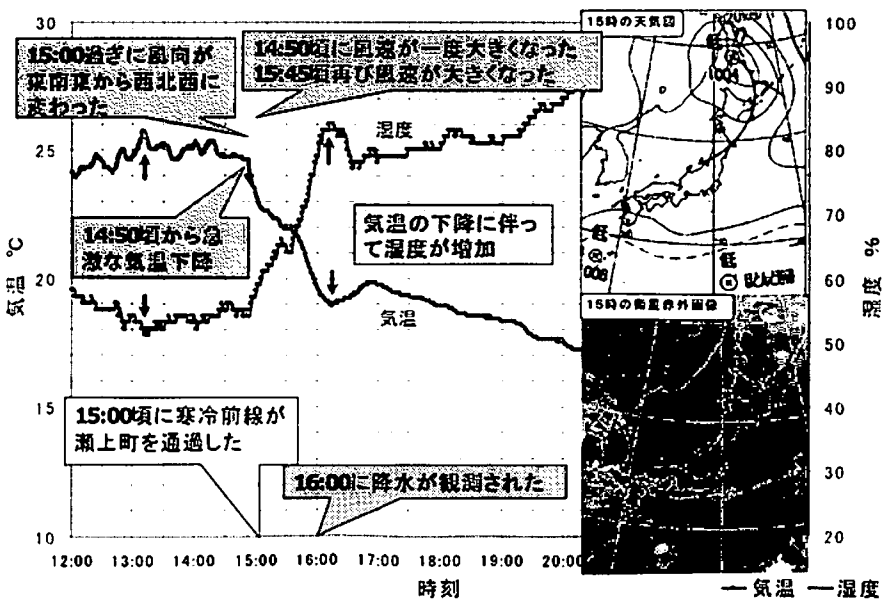


図8　気温と湿度の変化　2008.10.04　午後

(1) 手立て1「経験ファイル」の作成と活用について

手立ての一つ目として，図1に示した安価なポケット式クリアファイルを準備し，生徒に活用させることとした。これは，中学校入学当初から高等学校にかけて，各体験活動の事前・体験中・事後における様々な資料を綴じ込んでいき，体験後さらには数年後の進学・就職時に，蓄積してきた資料を振り返ることで自己理解を深めることにつながる，パーソナルポートフォリオ[6]としての活用を意図したものである。名称は，「経験ファイル」とした。

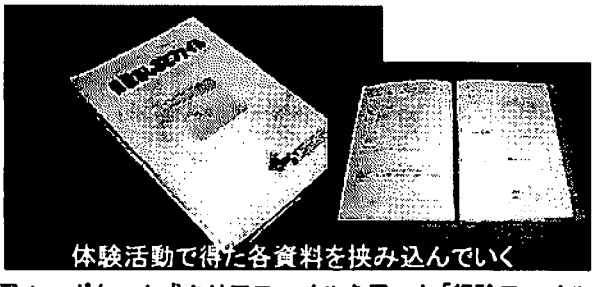


図1　ポケット式クリアファイルを用いた「経験ファイル」

(2) 手立て2「ジョブパスポート」の活用について

手立ての二つ目は，**図2**に示した「ジョブパスポート」の活用である。このシートは，厚生労働省のホームページからダウンロードが可能であり，「活動前，活動中，活動後，思い出」の四段階に分けて文章で記述していく形式で構成されている。各段階で感じたことなどを文章化し蓄積していくことで，自己理解を深めることをねらいとしたものである。

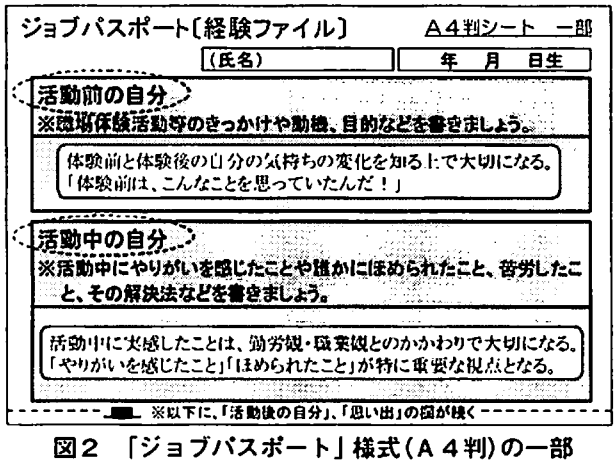


図2　「ジョブパスポート」様式（A4判）の一部

(3) 手立て3 資料となる各シートの開発と活用について

手立ての三つ目として，「自己評価シート」「グラフ化シート」の開発を行った。**図3**に「自己評価シート」の作成のプロセスを示す。

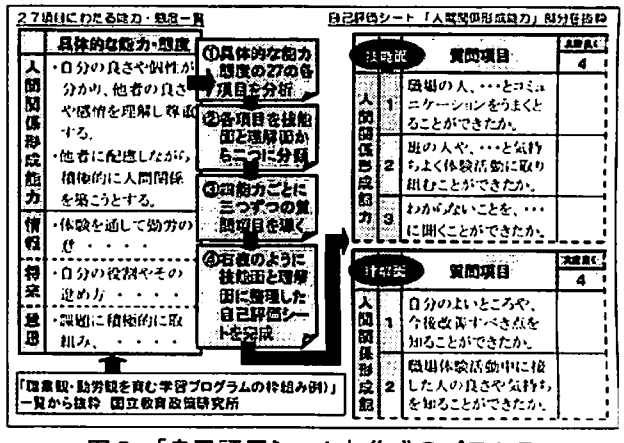


図3　「自己評価シート」作成のプロセス

まず，国立教育政策研究所による「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み（例）」[2]一覧に示されている，四能力の視点に基づく27項目から成る「育成することが期待される具体的な能力・態度」の分析を行った。その後，27項目を技能面と理解面の視点から分類し，職場体験中の活動内容に合わせて，四能力ごとに三つずつの質問項目を導き出した。最終的に24の質問項目からなる**図4**に示した自己評価シートを開発した。自己評価に当たっては，四件法で行うこととした。

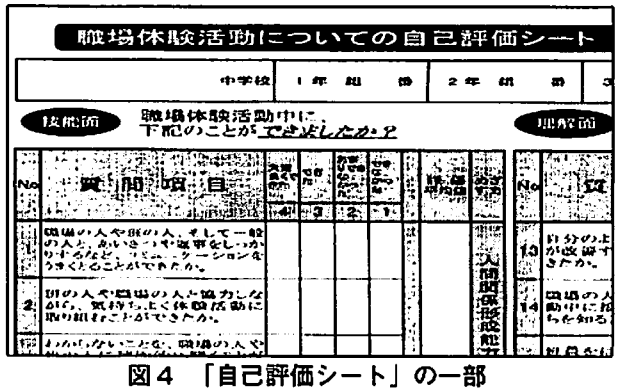


図4　「自己評価シート」の一部

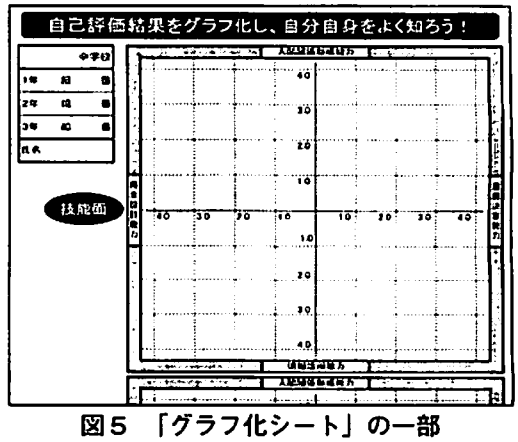


図5　「グラフ化シート」の一部

図5は，技能面，理解面から四能力ごとの平均値

を求め，グラフ化することで自己理解に役立てることができるようにした「グラフ化シート」である。

3　研究協力校における実践について

(1)　協 力 校：県内A中学校　第２学年　102名
(2)　実践対象：職場体験活動及び事前・事後活動
(3)　実践方法：
　①　５月当初に，経験ファイル等の活用に関する説明のためのオリエンテーションを実施。
　②　「ジョブパスポート」を事前・事後活動で活用。
　③　自己評価シートは，事前活動，体験中，まとめのそれぞれの活動内容に合わせて三種類作成し，活動段階ごとに実施しグラフ化。

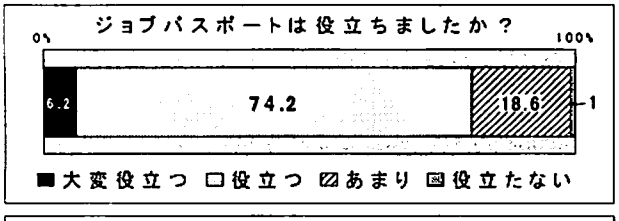
4　実践の結果と考察

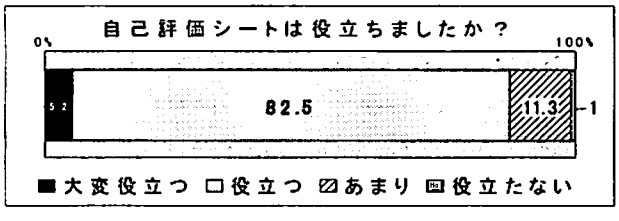
以下に，スポーツクラブ施設で体験を行ったA中学校のB男の，「ジョブパスポート」記述の一部を示す。

体験前	自分がスポーツ好きなので，この場所を選んだ。今までは教えられる身だったけれど，教える身を体験し，社会の中の活動はどういうものかを知るため。
体験中	あいさつをしたらあいさつを返され，やりがいを感じた。プリント折りの時に，職場の人から「熱心だね」とほめられた。プリントを何百枚も折り，ワッペンを何百枚も袋に入れる地道な作業に苦労した。
体験後	一番変わったのは，自分から積極的にあいさつをするようになったこと。働く上で時間を守ることはとても大切だと分かった。気が付いたのは，働いている人はみんな笑顔を大切にし，あいさつやコミュニケーションをしているなと感じた。

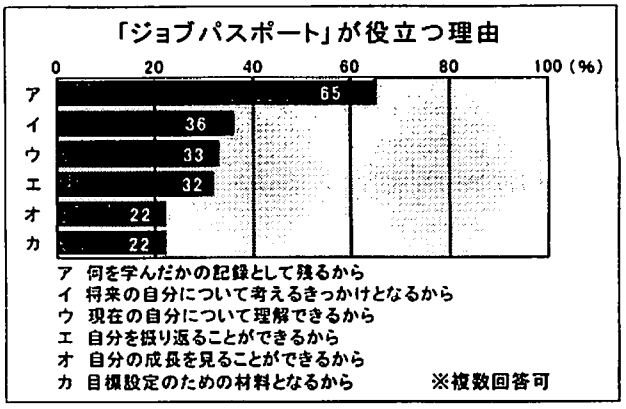
下線部からは，職場体験活動全体を通しての自己理解や職業に対する理解，並びに勤労観・職業観の深まりが読み取れる。

次に，研究協力校で実施した手立て２，３に関するアンケート調査の結果を以下に示す。





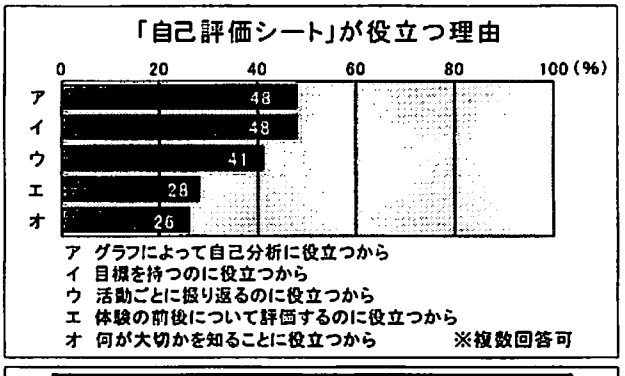
二つの手立てに対して，約８割の生徒が「役だった」と答えている。また，「役立つ理由」，並びに「振り返っての感想」を以下に示す。



「ジョブパスポート」に書いた内容を改めて読んでの感想

- 職場体験に行く前と、行ってからとでは考えていることが違うなと思った。
- 活動前と活動後で自分が変わったような気がした。
- 活動前は、「楽しい活動になるとよい。」と書いていたけど、活動後は「仕事のやりがい、苦労を感じた。」と書いていて、仕事に対する気持ちが変わっていた。「活動を通して成長したのだな」と思った。
- 活動前と活動後では、文章の書き方が変わっていた。活動後の文章は内容の要点をしっかりと書くことができていた。

「ジョブパスポート」については，役立つ理由として「何を学んだかの記録」が最も多い。感想からは，記録があることで，働くことに関する自分の考え方の変化に気付くなど，活動前に比べ職業理解や自己理解が深まっている生徒の様子が読み取れる。



四能力の視点から評価し、グラフ化して感じたこと

- 計画的に進めることがあまりできていないと思った。
- この四つの要素が社会で大事なのだと思った。
- 自己評価シートから、自分の良さや今後の課題を見つけ、克服し、自分の長所を伸ばしていきたい。
- 各質問に答えることで、今は何が大切なのかや、各活動ごとの自分について細かく知ることができた。
- 将来に対してあまり考えていなかったことが分かった。
- 班長だったので、意思決定能力が一番高かった。責任を持って活動するのが大変だった。

自己評価シートについては，役立つ理由として

「グラフ化による自己分析」「目標を持つのに役立つ」の二つが最も多い。感想からは，四能力に基づく各質問項目が，現在の自分を客観的に理解する視点として，また，現在の自分の不十分な点を見いだし，今後の自己成長のための目標設定の視点として有効に機能していることが読み取れる。

Ⅲ　研究のまとめ

1　研究の成果

(1)　キャリア教育を意識した体験活動を行う上で踏まえるべき四つの視点の提示

理論研究としてキャリア教育の目標を分析する中で，キャリア教育を実践していく上で踏まえるべき視点を四つに整理し，提示することができた。

(2)　自己理解を深めるための「自己評価シート」の開発及び実践を通しての改善

昨年度までの研究で開発した「自己評価シート」を活用するに当たって，研究協力校の教員と協議を重ねる中で，各活動段階ごとに形成的に評価し，グラフ化する形式に改良することができた。当初の条件を満たす，より実践的な形式に改善することができたと考える。

(3)　自己理解を深める「ジョブパスポート」，並びに「自己評価シート」の有効性

研究協力校において職場体験活動に焦点を当て，三つの手立てについて実践することを通して，当初目標とした「自己理解を深める」ことについての有効性を検証することができた。同時に，四能力の視点から質問項目を導き出し作成した自己評価シートが，生徒に今後の目標を持たせる上で有効な手立てとなることも確認することができた。このことは，課題とされている「働く上で必要とされる諸能力の発達」を促すことにもつながると考える。

(4)　キャリア教育を意識した自己評価項目作成のための視点の提示

「自己評価シート」については，各活動段階に合わせて作成を行ってきた。四能力の視点に基づく24の質問項目を活動段階ごとに導き出すことを通して，各質問項目を作成するための視点を見いだすことができた。学校独自の各体験活動に合わせて，「自己評価シート」を作成するための指標になると考える。

2　今後の課題

(1)　「経験ファイル」の職場体験以外の体験活動への継続的活用

今回は，職場体験活動に焦点を当て，各手立ての実践と検証が中心となった。当初の目標である自己理解や諸能力の発達のためには，他の体験活動での活用，並びに高等学校を含めた継続的活用についての実践並びに検証が必要であると考える。

(2)　「経験ファイル」作成のための教師用・生徒用マニュアルづくり

条件②（方法面）の「汎用性があり，どの学校でも活用できる。」を考慮すると，「経験ファイル作成の手引」等，各学校の教師並びに生徒に対しての説明用マニュアル作りが必要である。

(3)　「経験ファイル」の進路指導への積極的活用

今回の研究の中核となった「経験ファイル」が最も有効に機能するのは，進路選択時の自分の適性等を考える場においてである。「進路指導が出口指導に偏っている」との批判が多いことから，この「経験ファイル」を，定期的に行われる三者相談や進路相談の際に意識して取り上げるなど，日頃の学校生活と結び付けて積極的に活用を図る必要があると考える。

<引用・参考文献>

1）初等中等教育と高等教育との接続の改善について
（中央教育審議会　1999年）

2）キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書　（国立教育政策研究所　2004年）

3）キャリア教育入門　三村　隆男　著
（実業之日本社　2004年）

4）キャリア教育―自立していく子どもたち―
渡辺美枝子　著　（東京書籍　2008年）

5）小中学校のキャリア教育実践プログラム
鹿嶋研之助　亀井浩明　編著　（ぎょうせい　2007年）

6）ポートフォリオで進路革命！　鈴木敏恵　著

7）経験の意味世界をひらく　―教育にとって経験とは何か―　市村尚久　早川　操　松浦良充　広石英記　編
（東信堂　2003年）

8）入門進路指導・相談
仙崎武　野々村新　渡辺美枝子　菊池武剋　編
（福村出版　2000年）